

石巻復興きずな新聞 新聞配布活動レポート

記者ボランティア 栗田啓右

ガムテープが貼られた郵便ポスト、使用されていないガスメーター、大人の背丈を越すぐらいに伸びている雑草が生えている玄関…。人が住んでいない住居は一目で分かるものです。いま仮設住宅では空き室が増えています。

8月下旬、石巻市内の仮設住宅・復興公営住宅で、石巻復興きずな新聞第14号の配布を行いました。スタッフと武蔵野大学の学生を含むボランティアで新聞を手を持ち、「こんにちは！きずな新聞をお届けに来ました」と大きな声を出して、一軒一軒訪問しました。

きずな新聞では新聞発行による情報発信のほか、仮設住宅・復興公営住宅に訪れ新聞を手渡す活動をしています。手渡しをすることで住民さんとの間に会話が生まれるので、孤立を防ぐ見守り活動にも結び付いています。

「あっちの家もこっちの家も引っ越しちゃって。この棟にいるのは、うちだけなのよ」と話す70代の女性。その女性が住む棟は10世帯が入れる造りになっていて、仮設住宅の入居が始まった当時は満室でした。しかし、震災から時が経つにつれて、仮設住宅から復興公営住宅に移転する人、自力再建をする人が増え、また一軒また一軒と入居者が次第に減っていきました。震災から6年半が経ついま、隣近所に誰もいない状態になってしまいました。

「前は外から話をしている声や物音が聞こえていて、にぎやかだったんだよね。最近はすっかりと静かになってしまったよ」と話す表情は、寂しさでいっぱいの印象でした。生活の音や話し声がよその家から聞こえてくることは、住民さんの心の支えにも繋がっていたそうです。

私たちは住民さんの話に一生懸命耳を傾け「うん、うん」と頷くだけで、何かアドバイスをすることはできません。ただ、誰とも話さないで一日を終えてしまう日が多い住民さんから「久しぶりにいっぱい話できてよかった」と聞いた時、話を聴く大切さを噛みしめました。

配布活動はただ新聞を配るだけではなく、読者である仮設住宅・復興公営住宅で暮らす住民さんとのコミュニケーションを育む場でもあると感じました。「最後の一人が仮設住宅を出るまで」を目標に、新聞発行、そして配布活動を続けていきます。

8月23日、三ツ股第二復興住宅の集会所で「昔遊び&お茶っこ会」を開催しました。

「近所に話し相手がないのよ」。「石巻復興きずな新聞」をいつも支援してくださる方から伺ったお話でした。世帯数199戸の三ツ股第二復興住宅は昨年12月に住民さんの入居が始まりました。石巻市は2005年に雄勝町や河北町など6つの市町村と合併。三ツ股第二復興住宅の住民さんは様々な地域から来た方ばかりです。そのため同じ復興住宅の住人さんも「周りとお話する機会がない」と話してくださいました。

仮設住宅や復興住宅において近くに住む人と関わりを作ることはとても大切です。十分なコミュニティが作れないと住民同士のトラブルや孤独死、アルコール中毒など様々な問題を引き起こす要因になります。

「昔遊び&お茶っこ会」開催の日。連日降り続いた雨も止み、この日は少し眩しいぐらい太陽の日差しが照りました。少し暑い日ではありましたが、お茶っこが始まると小学生から92歳のおばあちゃんまで15人が集まりました。最初は住人さん同士、隣には座らず、席と席の間を開けて座っていました。しかし県内外の支援者の方々が寄付して下さった昔遊びの仙台カルタやお手玉などで遊ぶにつれ、だんだんと笑い声が響き始めました。特に、トランプをしていた住人さんたちはゲームが終わるたびにもう一度やりたいと仰っていました。また事前に書いていただいた、住んでいる棟の番号から、偶然にも隣同付け士だった住民さんだということも発覚した住人さんも。家族の話などで盛り上がり、最後は「またお茶っこやろうね」と約束して帰られました。

今回、二時間ほどの「昔遊び&お茶っこ会」で多くの方々のキラキラとした明るい表情を見ることが出来ました。しかし三ツ股第二復興住宅の中に、まだまだ孤立している住人さんも多いはず。他の復興住宅でも「せっかく集会所はあるのに利用することもない。近所とは軽い挨拶ぐらい」、そう語る住人さんに出会いました。今後もサロン活動を通して、住民さん同士を繋いでいく必要性を感じました。